



断想

石田 章

随想

久し振りに壬生狂言を見た。学生の頃、一、二度見て非常にひかれた記憶がある。以前と変わっているのは見物席が立派になっていることだ。壬生寺会館というのが新しく建てられている。これは鉄筋建てで、人々はその窓辺に並んだベンチに腰掛けて見物する。壬生寺という寺そのものが割合いに殺風景な寺で、この会館も特別に立派だとはお世辞にも言えない。むしろ、以前のような、ケバのたった畳の上に直接あぐらをかいて見物する、といったあの素朴な風情のなくなったのが惜しいくらいだ。いかにも風通しがよすぎるのだ。乾

燥しすぎた感じがする。

しかし、狂言が始まると、やはり昔の懐かしさが急によみがえってきた。そこには演劇の原始に近い実体がある。おおらかなのどけさが私の心をなごませた。見物席の後の床では近所の悪童どもがドタバタと走り回り、入口に近い土間には飴やするめを並べた小店がむしろを敷いて出ている。見物は子供を負ぶった近所のおかみさん、腰の曲ったおばあさん商売の途中にでもふとのぞいたのか、膝の出したズボンのおっさん、かと思うと、カメラをぶらさげた若い外人の男女もいる。大学生とその母親らしい上品な婦人が仲良さそうに肩をくつつけて見ている。若い大人しそうなアベックは一番前の席で膝をかかえて見入っている。劇が、すべての人々の中に、何の屈託もなく融け込んでいる。ひよっとこ面の従者が、卑猥な身振りでおどけると、男も女も、屈託のない笑い声をあげる。これは健康なエロティシズムの標本である。此処にいる人々は、おそらく、おおらかなりし普ての古の人々の心を、ふと取り戻しているのだ。此処にいる間、人々は、現代の煩雑を忘れ、現代のみみっちさを嘲笑うことが出来るかのようにだ

った。

壬生狂言を見た後、私はその足で在阪の或る新劇団の公演を見るために大阪へ行った。だが、そこで私の見たものは何という寒々とした光景であったことか。舞台にも客席にも、氷のような空気がただよい、笑いひとつ起らない。何のために彼らは芝居し、何のために彼らはそれを見ているのか。芝居することの、そして芝居を見ることの本当の意味を全く見失ってしまったっている一群の人達が、舞台の上と下とに凝然と相對しているだけだ。そこにはいかほどの心の交流もありはしない。私はそこに、意味を失ったまま、しかも、意味を失ったことすら気付かない。不幸な現代の群像を見た。

私は、三十分、じっと我漫して席に坐っていたが、遂にその鉄のような冷い空気に耐えきれなくなって、外に出た。道頓堀の濁った空の方が、まだしも人間の息吹を感じさせ

た。騒音にうなる大阪の街を歩きながら、その宵、何故か私はひどく憂鬱であった。

(女子大講師・英文学)

私の映画論

財前定生

同志社大学を卒業し、同志社に奉職三十有余年のいわば生っ粋の同志社人の語りぐさ。

『同志社高校卒業生の京都大学入学率はすばらしい。他の官立高校を遥かに上廻っている……』

以下、私の疑問。——良心を手腕に運用する新島精神の同志が、脱落して京大に落ちのびて行くのを、さも誇らし気に語る神経は、どういうものだろう。京大入学率が、良心を手腕に運用する人づくりのバロメーターとでも心得ているのだろうか。もっとも、これは学業成績の優秀さを強調したのでしょうか、それにしても、いささか同志社教育の根本理念のひ弱さを暴露した感じ。

同志社には他の教育機関とは比較すべくもない独特の基督教精神があるのだから、中学、高校、大学と一貫した教育をさすげ、一人前のクリスチャン育成への情勢を再確信する必要がありはしませんか。

そして今一つ。

新島精神を具体化するための人づくり稼業

——教師が出来の悪い生徒の父兄を呼び出しでの語りぐさ。

『うちの学校は優秀なので、お宅のお子さんには無理でしょう。今のうちに××学校に転出された方がよろしいでしょう』

以下、私の疑問。——この教師は、人づくりを真面目に考えているのだろうか。教師としての最大の苦心を払ったにもかかわらず思わしい成績が出なかったからと言って、その生徒を他校に放り出す神経は、どういうものだろう。

これも、京大への入学率と同じで、基督教精神の欠かからくる教育理念のひ弱さだろうと思うのだが。学科の点数にのみ興味と関心がある教師は、一見教師的ではあるが、とても人を導く柄ではなさそうだ。

そして更に今一つ。

現在の同志社人が、自覚するとしないとにかかわらず、官立学校に対する劣等感を抱いていることはほぼ確実だと思いますが、これは、イエス・キリストの枝としての自信が無いからでしょう。同志社全体が、基督教精神に満たされていないから、こんなブザマな語り

種が出る学校になり下ってしまったのです。

同志社自体がこう言う状態だから、世間も同志社を甘く見ます。私の関係している映画界の人間の言いぐさ。

『君は同志社に顔がキク（とんでもない）らしいから、いっちょ頼むわ……』

同志社自身の官立に対するぬぐいがたい劣等感が、世間の同志社に対する評価をだらしないうものになっているとは思えません。如何に入学は厳正にやっているかと力説これつとめても、その裏には情実がモノを言うと言信じて疑わない人種がいるんだから弱ってしまう。

私は、この入試の厳正についても、ただ官学流の猿真似にいささか疑問を持っています。これは後の機会に述べるとして、世間の同志社に対する評価の責任は、同志社精神の薄弱さにあると断定したくなるのですが……。なんとか、同志社の宗教改革を実現したいものです。

映画について何か……と言う編集子のご注文でしたが、映画とてこれと同じこと。批評家やベスト・テンなどに目がくらんで、大衆娯楽の精神を忘れたとき、映画の迫力は枯渇してしまいます。私どもの苦心は、もっぱら

大衆娯楽に於ける宗教改革運動です。

(昭二七・大神・大映プロデューサー)

母校が与えるもの

平岡 澄江

卒業後三十六年間一度も会う折りのなかつた一級友が、さる四月に宮崎県からやってきました。七人の子供のうち、少くとも一人はぜひ母校に送って同志社教育を受けさせたいというのが、彼女の長年の望みでした。その念願がかなって、女子大に入学を許されたお嬢さんを伴つての上京でした。私達はどんなになつかしく語り合つたことでしょう。

この時の友の言葉の中で、ここに書き記しておきたいものがあります。「卒業した学校を『母校』とは実によく言つたものである。在学中に、いつしか植えつけられた教えは道の光となり、思ひ出は心の灯となつて今日までの生活の大きな支えとなつたことを、年と共にますます深く感じている。いくつになつ

ても慕わしい母、その母に對すると同じ思いを自分は母校に對して持ち続けている。同志社は今も、そして今後も、ここに学ぶ者一人一人に一生涯消えることのない心の灯を与えつづけてほしいものである」というのがその要点です。私達卒業生の心の灯となり道を照らすもの、それは何なのでしょう。最高学府の名に恥じない深い学識でしょうか、それとも人間としての高い教養なのでしょう。こゝろな「然り」です。しかし、これだけのことができません。これらにプラスする何もありません。同志社でなければ培うことのできない何ものかがあります。それはここに学ぶ者の心に、いつしか植えつけられ芽ばえてくる精神的な何ものかです。目に見えず言葉に言いつくし難い何かの力なのです。あえて言葉を借りるならば、それは「神の忠実なる僕であられた新島先生の祈りと教えに基づく同志社教育からにじみ出る何ものかである」と言い得るでしょう。これこそ同志社の特つ宝です。どれほど充実した教授陣と完備した教育施設を持ち、いわゆる up-to-date の学術が授けられつつあつても、もし同志社が

曾て私達に分け与えてくれたあの心の灯を、現在ここに学ぶ学生達に与え得ないといううなことがあるならば、それは実に悲しむべきであると思います。もし母校がこの宝を失うようなことがあるならば、それは塩がその味を失うが如きことになるでしょう。

現在私は中学校に所属していますが、ここに学ぶ若い人達の心の中に驚くべき芽ばえを発見して、心のおどる思いをすることがしばしばあります。入学して一年もたない生徒がこういきました。「同志社に入つてから僕の心は変わりました。もし僕の物をとろうとする人があつたらその人に何でもあげたい気持ちがあります。そして何故そんなことをしなければならぬかを聞いてみたいと思ひます」また、他のある生徒は、「私は地に落ちて多くの実を結ぶ一粒の麦のようでありたいと願つています」と目を輝かせて語つてくれました。私達が母校の宝であると信じているものがこのようにして、ここに芽ばえ育てられていくことを見出して大きな喜びを感じ、その良き成長を心から願つております。

(中学教諭・英語)

怒らぬ若者たち

河野 仁 昭

つい先年「太陽族」という言葉が世間のかまびすしい話題になった。この世の習慣や倫理などおかまもなく、無鉄砲に自由奔放にふるまう若い世代を、人々はそう呼んだ。そう呼ばれた彼等の中のある者は、旧い秩序など叩きこわして新しいモラルをわれわれが創造してやるからと気負っていた。その話題もすっかり下火になったいま、彼等は何物も破壊しはしなかったし、創造もしなかったと、その帰結に対する想いにはなにか物足りぬ感が伴わぬでもない。

ところで、ぼくはもう一度「太陽族」論議をむしかえすつもりはない。ただ、仕事をとおして、いやプライベートの場合も含めて日頃ぼくが関係している学生たちと例の「太陽族」の間に妙な類似性のあることが、どうも気になるのだ。

表面的世間的には、あれほど破壊的で無鉄砲な「太陽族」諸君は、いったん家庭へはいると子羊のごとく従順であった。特に彼等は

彼等のママには実にヨワイのだ。この二面性は、生活手段を持たない彼等の計算上の保身術だったかも知れない。多分それもあったろうが、とにかく彼等には、ママの期待を裏切るつもりなど、これっぽちもないのである。

彼等が破壊も創造もしなかったこととそれは無関係ではなくて、表面的世間的なふるまいは、実はその甘えの裏返しに過ぎなかった。

学生たちに類似性があるというのはその点である。彼等の大多数は、知的生活の場を求めて大学の門をくぐりはしない。そういうい方に語弊があるならば、その願望よりは、ママの期待にそむかずによくサラリーマンになりたいという意識をより強く持つて集まってくる、と言ひ直そう。よりよい成績をとろうとする配慮なり努力は、より高度に知的生活を営み満喫しようという意欲と、かならずしも一致するとは限らない。この認識は、学校に職を奉ずるべくにはこのうえなく淋しい認識である。

おそらく人は反論するであろう。こういう競争社会では止むを得ぬではないか——と。むしろそれを認めるにやぶさかなものではない。しかし、だからと言って、学校が本来の

機能を半分か三分の程度しか發揮し得ぬ状態に陥っているとき、つまり、就職への予備校的なものへ顛落しかねない危機にさらされているとき、それでよしとしているわけにもいかないでないか。教育の新しい態度の創造と社会に対する厳しい要請が必要だし、それに学生たちも不用斐ない。少数の声であれなんであれ、学館の管理方法がどうだ、ポポロ座判決がどうだ、原子力潜水艦の寄港がどうだと、よくもこう種があるものだろうんざりさせられるほど、毎日拡声器でがなりたてる。よろしい、若い学生諸君のことだ、怒りなければ怒るがいい。耳障りなのは我慢もしよう。

だが、彼等個々人と学園へ有形無形の圧力を加え、学生生活を根底からゆすぶり続けているものに向かつては、どうして彼等は怒ることができないのか。何故そのように、しおらしく従順でいられるのか。撥ね返そうとはしないのか。

今年も、もう就職のシーズンである。彼等が真剣であるほど、ぼくは彼等への応対が心もたなくなってくるのである。